特集：主体的・対話的で深い学びをめざす教科用図書・教材の活用
ネットいじめ防止に関する主体的・対話的で深い学びの実践
～暗転型の情報モラル教育からの転換を求めて～

清　水　祥　平（越谷市立大袋小学校）
今　田　晃　一（金沢学院大学文学部教育学科）

Practice of Profound Leaning in Self-Directed and Interactive Manner in Terms of Prevention of Internet Bullying:
Conversion of Information Moral Education to Prevent it from Changing for Worse

SHIMIZU　SHOUHEI, IMADA　KOICHI
(Ohbukuro　Elementary School, Koshigaya-City)
(Faculty of Letters Department of Education, Kanazawa Gakuin University)

要　旨

学校における情報モラル教育は、一定の効果を上げていることも明らかになっているが、児童生徒のあいだで、無料通話アプリ等を通した「ネットいじめ」の発生が新たな課題として問題視されている。そこで本研究では、新学習指導要領のキーワードの一つである「主体的・対話的で深い学び」に留意し、情報モラル教育、とくに「ネットいじめ」に焦点をあてた題材を開発し、授業実践を行った。結果、学習者に当事者意識を涵養させるためには、自身の立場（傍観者、支援者、通報者等）を意識させ、いじめ防止に対して自身ができることを考えさせることが、指導上の留意点として大切であることが本実践を通じて明らかになった。暗転型の情報モラル教育を転換するための、ひとつの実践事例として提案したい。

1．はじめに

小学生や中学生、高校生のあいだで、「ネットいじめ（cyberbullying）」の発生が問題視されている。ネットいじめの被害に対する否定的な感情は、ネットを用いない一般的ないじめ被害と同程度に高いことが報告されている[1]。

さらに近年では、いわゆるLINEに代表される無料通話アプリ（以下「LINE」と略す）を通して、否定的な内容を携帯機器に送信されたり、十分な返信がなされなかったりすることで、悲しみや不安、怒りの喚起という深刻な心理的なダメージが生じることも示されており、それらの技術的な対策も提示されているが、多くの児童生徒がその対応に苦慮しているのが現状である[2]。

一方、新学習指導要領における「情報モラル教育」であるが、小学校の道徳では、「情報モラルに関する指導を充実させること」[3]と書かれており、現行の「留意する」からさらにその中身を社会や学校の現状に合わせて充実させることが求められることになった。

また道徳が教科化された背景には、2011年に大津で起きたいじめ自殺事件やそのほかにも重大な少年犯罪が増えてきていたことを鑑み、安倍内閣に設置された教育再生実行会議は、いじめ問題への対応として、道徳を教科化することを提言した[4]。それに関連し、2013年にはネットいじめを含む「いじめ防止対策推進法」が施行された[5]。

そこでは、学校の設置者及び学校が講ずべき基本的施策として①道徳教育等の充実、②

早期発見のための措置、③相談体制の整備、④インターネットを通じて行われるいじめに対する対策の推進が定められた。

また国及び地方公共団体が講ずべき基本的施策として、①いじめの防止等の対策に従事する人材の確保等、②調査研究の推進、③啓発活動について定めることとしている。

一方、『生徒指導提要』[6]では、「観衆」「傍観者」の在り方を含めたいじめの構造的な理解のもとに、全教育活動を通して児童生徒の安全を確保することが強調された。

さらに新学習指導要領の大きな特徴は、各教科を勉強するときの基盤となる能力の一つとして、「情報活用能力」が位置づけられたことである。これからの学習活動は、ICTを活用して、主体的・対話的で深い学びを通して情報活用能力を育むことが大切となる。

ここでいう情報活用能力とは、ICTを活用する操作技能だけでなく、情報の収集と整理、自身の意見の生成と伝達という幅広い力を指すとともに、情報モラルを含む情報活用能力を育んでいくことが、これまで以上に重要となる。

筆者らは、これまで映像教材を含むICT活用が、「特別の教科　道徳」の実践で有用であることを提案してきた[7]。また、映像による状況の理解は、対話的な学びの時間を確保することにつながる。特に情報モラルに関する学習内容の場合は、実際にICTを活用しながら体験的に学ぶことが深い学びにつながることを提案した[8]。

そこで本研究では、新学習指導要領のキーワードの一つである「主体的・対話的で深い学び」に留意し、情報モラル教育、とくに「ネットいじめ」に焦点をあてた題材を開発し、授業実践を行った。

越谷市に平成30年度より新たに導入されたタブレット端末（iPad一人1台使用可能）と協働学習支援アプリ（ロイロノート）の最大限の活用することにより、主体的・対話的で深い学びを促進し、学習者に「ネットいじめ防止」に対する当事者意識を涵養するための学習指導上の留意点を明らかにすることが本研究の目的である。

２．授業実践のための事前調査

（１）事前アンケート調査

越谷市立A小学校５年生の１クラス（児童数３６名）を対象に質問紙を配付し、事前アンケート調査を実施した。

１）調査時期

2018年9月4日、所要時間約10分。

２）調査内容

いじめに関する質問を15項目作成した。いじめの加害・被害の経験や、国立教育政策研究所が実施した「いじめ追跡調査」[9]に合わせたいじめの経験に関する質問、東京都教育委員会が作成した「いじめ総合対策【第二次】」[10]の中で示されている「重大性の段階に応じたいじめの類型」を元に、6つの事例について「いじめに該当する」と感じるかどうかという意識を尋ねた。また、いじめを見かけたときにどう行動するかについて複数回答可の形で尋ねた。

３）結果

現学年に進級してからのいじめの有無は、加害経験者が19.4%、被害経験者が16.7%であった。

また、具体的ないじめの被害頻度に関する６項目について表１に、いじめ事例に関する意識について表２にそれぞれ示す。

さらに、いじめを見かけたときに自分ならどのような行動をとるかについての回答は表３の通りである。

４）考察

これらの結果から、具体的ないじめの被害頻度については、暴力系のいじめよりもコミュニケーション系のいじめの方が多い傾向があることが明らかになった。また、約45%の

児童が自分専用の携帯電話やスマートフォンを所有していて、日常的にインターネットを利用しているが、ほとんどの児童がネットいじめの被害に遭っていないことがわかる。

表１．具体的ないじめの被害頻度

質問項目	選択肢	(n=36)
仲間はずれにされたり、無視されたり、影で悪口を言われたりした。	1週間に何度も	5.6%
	1週間に1回くらい	8.3%
	1ヶ月に2、3回	0.0%
	今までに1、2回	19.4%
	まったくない	66.7%
からかわれたり、悪口やおどし、イヤなことを言われたりした。	1週間に何度も	2.8%
	1週間に1回くらい	5.6%
	1ヶ月に2、3回	8.3%
	今までに1、2回	16.7%
	まったくない	66.7%
軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、けられたりした。	1週間に何度も	0.0%
	1週間に1回くらい	5.6%
	1ヶ月に2、3回	5.6%
	今までに1、2回	13.9%
	まったくない	75.0%
ひどくぶつかられたり、たたかれたり、蹴られたりした。	1週間に何度も	0.0%
	1週間に1回くらい	8.3%
	1ヶ月に2、3回	0.0%
	今までに1、2回	11.1%
	まったくない	80.6%
お金や物をとられたり、こわされたりした。	1週間に何度も	0.0%
	1週間に1回くらい	0.0%
	1ヶ月に2、3回	5.6%
	今までに1、2回	5.6%
	まったくない	88.9%
インターネット（パソコンやスマホ、携帯など）で、イヤなことをされた。	1週間に何度も	0.0%
	1週間に1回くらい	0.0%
	1ヶ月に2、3回	0.0%
	今までに1、2回	8.3%
	まったくない	91.7%

表２．いじめ事例に関する意識

質問項目	選択肢	(n=36)
発言の苦手な子に、親切で「〇〇さんも意見を言いなよ」と強く言う。	いじめだと思う	36.1%
	いじめだと思わない	63.9%
リレーでバトンを落とした子に、悪気はないが「何やってんだ！」とどなる。	いじめだと思う	36.1%
	いじめだと思わない	63.9%
うっかりぶつかってきた子に、つい「死ね」と言ってにらむ。	いじめだと思う	91.7%
	いじめだと思わない	8.3%
うっかりぶつかってきた子に、かっとなってしまって、なぐりかかる。	いじめだと思う	88.9%
	いじめだと思わない	11.1%
運動の苦手な子に「あなたのせいで負けたの、わかってるの！」と問つめる。	いじめだと思う	88.9%
	いじめだと思わない	11.1%
体育着をかくして、かくされた子が探している様子を笑って見ている。	いじめだと思う	100.0%
	いじめだと思わない	0.0%

表３．いじめを見たときにとる行動

(n=36)	選択肢	回答数
いじめを見かけたらどうしますか（複数回答）	やめるよう加害者に言う	12
	先生や家族など、大人に知らせる	22
	被害者にこっそり味方であることを伝える	10
	その場の空気を変える行動をとる	8
	何かすべきだが、できないかもしれない	11
	自分には関係ないから何もしない	9
	どのように行動したら良いかわからない	4
	自分が被害者になりたくないから加担する	0

また、表２の質問項目は、やられた児童が心身に苦痛を感じた場合「いじめ」と認定される「法令上のいじめ」に該当する。しかし、児童の多くは、厳しい叱責や暴言、暴力についてはいじめであると認識しているが、親切心から出た言葉や発言した側に悪意がない場合はいじめと認識していない傾向がある。つまり、社会通念上のいじめだけをいじめと捉えていることがわかる。

さらに、表３から、いじめを見かけたときにやめさせたり、大人に伝えたりすべきであると考えている児童が多い一方で、積極的に関わりたくないと考えている児童や、何かすべきであると思っていても行動にうつす自信がない、傍観者や観衆にとどまってしまう可能性のある児童もいることがわかる。また、その場の空気を変える「スイッチャー」として振る舞おうと思っている児童は少ない。

以上の結果を踏まえ、まずは「いじめ防止対策推進法」をもとに正しいいじめに対する理解と、それを防ぐために一人一人が担う役割分担を認識させることが重要であると考えられる。

３．「ネットいじめ防止」を題材とし、ICTを活用した主体的・対話的で深い学びの実践

（１）越谷市のICT環境（iPadとアプリ）と情報モラル教育の現状

越谷市では平成30年度の夏季休業中に市内全小学校に児童用iPad40台と教師用iPad1台が導入された。その中に授業支援アプリ「ロイロノート・スクール」が入っている。

ロイロノート・スクールは、シンプルで使いやすく双方向型の授業を実現するための優れた教育ICTツールである。本実践では、このロイロノート・スクールを活用し、児童が主体的に学ぶ授業を目指した。

筆者らは、埼玉県越谷市の小・中学校全45校を対象にした情報モラル教育の実態調査

を行った[11]。

そこから、教員は情報モラルの必要性を感じている。実際に様々な指導場面で情報モラル教育を行っており、指導を受けた越谷市の児童生徒はインターネットの特性について埼玉県の平均とほぼ変わらない知識を有していることが明らかになった。また、9割以上の児童生徒が身近なところでネットいじめを体験したり見聞きしたりしたことがなく、越谷市の情報モラル教育に効果があることがわかった。

現在も、身近なところでネットいじめを体験したり見聞きしたりした児童は極めて少ないものの、スマートフォンを買い与える保護者やLINEを使用する児童生徒、情報モラルについて指導をする教員からは、ネットいじめについて不安を抱いている姿が見られる。

以上のことからも、スマートフォンを使い始める年頃である小学5年生を対象に予防的な授業を検証することとした。

（2）授業実践の概要

ネオ・デジタルネイティブと呼ばれる児童にとって、動画は身近なものであり、その有用性についての研究も進められている[12]。また、NHK for Schoolの道徳映像教材「ココロ部」[13]は自己の生き方を考える道徳の教材として優れていることが明らかになっている[14]。これらを踏まえ、NHK for School「ココロ部」の中からネットいじめを題材にした「みんなに合わせる“友情”」を用いた授業を実践することとした（図1）。

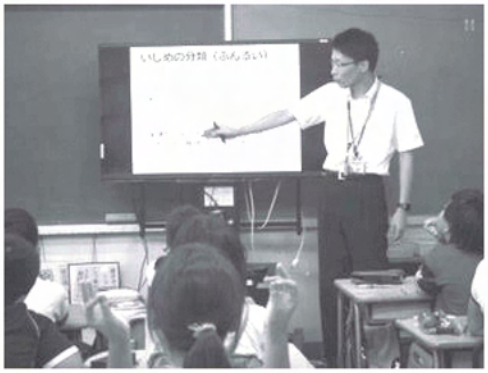


図1．授業の様子（いじめの分類の説明）

なお、授業の展開は次の通りである。教科は、「特別の教科　道徳」の時間で、5年生36人を対象に行った。

①「ココロ部」前半部分を視聴する（約5分）

「みんなに合わせる“友情”」を番組開始から5分7秒まで視聴する。視聴前に主人公のコジマくん（高校1年生）やクラスメイトのナナミなど、主な登場人物や物語の情況について簡単に伝える。視聴にあたっては、主人公であるコジマくんの立場になって考えながら視聴するよう指導した。

視聴した約5分のストーリーは、次のような展開である。

クラス全員が参加している「グループトーク」の中で休日遊びに行く話題で盛り上がっているが、当日用事があり参加できないナナミが「みんなヒマでいいね」という書き込みをしたことで仲間はずれにされ、ナナミを除いた新しいグループが作成される。その中でナナミへの不満をクラスメイトたちが書き込み、コジマくんへも同意を求める書き込みがされる。

②意見をタブレット端末へ書き込み、交流する（約11分）

映像を視聴した後、1人1台のタブレット端末（iPad）のアプリ「ロイロノート・スクール」を使って、コジマくんがとるべきだと思う行動を書き込ませる（図2）。

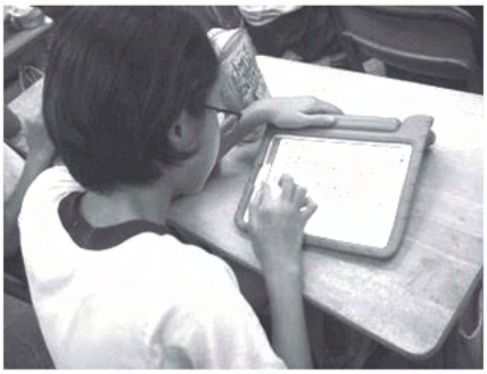


図2．タブレット端末に意見を書き込む児童の様子

その際、書き込んだ意見についてはロイロノート・スクールの提出機能を用いて大型テレビに映し出し、クラス全員で共有することを伝える。さらに無記名で共有することを申し添え、恥ずかしがらずに本音を引き出す。また、児童から出にくいと予想される意見を予め教師が紛れ込ませておくことで、児童の考えを揺さぶるようにする。

「本当はナナミを仲間外れにすることを止めたいと思っていてもそれができずに周りに合わせてしまう」という意見があった場合、望ましい行動ではないが、そうしてしまう気持ちを認め、否定しないよう留意する。

③いじめ防止対策推進法について知る（約15分）

ここで一旦ココロ部からは離れる。事前アンケートの結果を提示し、学級におけるいじめの現状や児童の意識をまずおさえる。次に「いじめ防止対策推進法」について教師から簡単に説明をする。いじめの定義が法律で明確に定められたことを伝え、「被害児童が心身に苦痛を感じた」ら法令上は全ていじめに該当することを理解させる。具体的な例として、事前アンケートで調査した前出の表２を提示し、多くの児童がいじめであると認識していない事例も被害児童が苦痛を感じていればいじめに該当することを知らせる。

次に実際に使用した学習ノートの「いじめの構造」について整理したものを図３に示す。

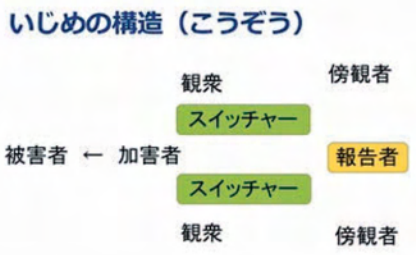


図３．いじめの構造(学習ノートより)

当然、加害者になってはならないこと、いじめはどんな理由があれ絶対に許されない行為であることを踏まえた上で、いじめを見てみぬふりをして無関心でいるのではなく、報告者やスイッチャーになることを指導する。特にスイッチャーとして適切な行動がとれると、その場でいじめをやめさせることができることを強調して伝える。

④「ココロ部」後半部分を視聴する（約５分）

この後の展開において、コジマくんがスイッチャーとしてどう振る舞ったら良いか考えながら視聴させる。

視聴した約５分のストーリーは、次のような展開である。

ナナミを除いたグループトークで、クラスメイトのタイキが「ナナミの悪口を言うのはやめよう」と書き込んだことで、今度はタイキを仲間はずれにしたグループが作られる。そのグループには先程ターゲットにされていたナナミも参加していて、タイキの悪口をみんなが書き込んでいる。そこで再び「コジマもそう思うだろ？」と書き込まれ、どう返すべきかコジマは悩む。

⑤ワークシートに意見を書く（約３分）

グループトークの画面のような枠を設けたワークシートに、コジマの立場に立ってメッセージを書き込ませる。その際、タイキのように真正面から「やめよう」と声を上げるのではなく、あくまでもスイッチャーとしてうまく沈静化できる言葉を考えさせる。また、現実でも子どもたちのインターネットでのやりとりには即レス（すぐに返事を返すこと）が求められていることから、ワークシートに記入できる時間は３分だけに制限する。

⑥本時の学習を振り返る（約６分）

「スイッチャー」をキーワードに、本時の振り返りをワークシートに記入させる。また、⑤の活動でワークシートに記入したメッセージは次時に全員で共有することを伝える。

クラスの１人を仲間外れにし、「そう思う

だろ？」と同意を求められる場面が２回あり、「スイッチャー」についての知識を得る前後で児童の考えが変容し、「深い学び」になる。

授業の流れや指導のポイントを添付資料（１）に、授業で使用したワークシートを添付資料（２）にそれぞれ示す。

（３）事後アンケート

事前アンケートと同じ３６名を対象に質問紙を配付し、事後アンケート調査を実施した。

１）調査時期

2018年9月12日、所要時間約10分。

２）調査内容

事前アンケートと同じ形式で、具体的ないじめの被害頻度に関する６項目を除いた調査を実施した。

３）結果

現学年に進級してからのいじめの有無に関しては、加害経験者が25.0%、被害経験者が33.3%となり、事前アンケートに比べて加害経験が5.6ポイント、被害経験が16.6ポイント上昇した。これは、授業実践以前はいじめの定義が各々異なっていたが、今回の授業で法令上のいじめの定義を理解し、それと自分の経験を照らし合わせて再考したことが要因であると考えられる。

また、具体的ないじめの被害頻度に関する６項目について事前事後の比較を表４に、いじめ事例に関する意識について事前事後の比較を表５にそれぞれ示す。

表４．いじめ事例に関する意識　比較

質問項目	選択肢	事前	事後
発言の苦手な子に、親切で「〇〇さんも意見を言いなよ」と強く言う。	いじめだと思う	36.1%	72.2%
	いじめだと思わない	63.9%	27.8%
リレーでバトンを落とした子に、悪気はないが「何やってんだ！」とどなる。	いじめだと思う	36.1%	75.0%
	いじめだと思わない	63.9%	25.0%
うっかりぶつかってきた子に、つい「死ね」と言ってにらむ。	いじめだと思う	91.7%	100.0%
	いじめだと思わない	8.3%	0.0%
うっかりぶつかってきた子に、かっとなってしまって、なぐりかかる。	いじめだと思う	88.9%	100.0%
	いじめだと思わない	11.1%	0.0%
運動の苦手な子に「あなたのせいで負けたの、わかってるの！」と問つめる。	いじめだと思う	88.9%	97.2%
	いじめだと思わない	11.1%	2.8%
体育着をかくして、かくされた子が探している様子を笑って見ている。	いじめだと思う	100.0%	100.0%
	いじめだと思わない	0.0%	0.0%

(n=36)	選択肢	事前	事後
いじめを見かけたらどうしますか（複数回答）	やめるよう加害者に言う	12	13
	先生や家族など、大人に知らせる	22	21
	被害者にこっそり味方であることを伝える	10	10
	その場の空気を変える行動をとる	8	17
	何かすべきだが、できないかもしれない	11	4
	自分には関係ないから何もしない	9	1
	どのように行動したら良いかわからない	4	4
	自分が被害者になりたくないから加担する	0	0

表５．いじめを見たときにとる行動　比較

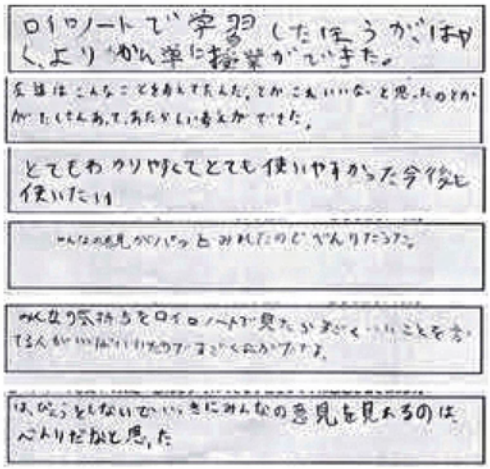
４）考察

表４に示したいじめ事例に関する意識を比較すると、いずれの項目もいじめであるという認識が高まった。これも多くの児童が授業を通して、法令上のいじめの定義について正しく理解したことによるものであると考えられる。

また、表５に示したいじめを見たときにとる行動を比較すると、「何かすべきだとわかっていながらできない」や「関係ないから何もしない」といった回答が減少し、「その場の空気を変える行動をとる」が大きく増加した。授業を通してスイッチャーとして行動しようという意識が高まったことの表れであるといえる。

４．まとめと今後の課題

タブレット端末（iPad）と協働学習支援アプリ（ロイロノート）を用いた授業について、児童の感想を図４に示す。


ロイロノートで学習したほうがはやく、よりかん単に授業がすすんだ。

友達はこんなことを考えてたんだ、とかこれいいな、と思ったのとかがたくさんあって、あたらしい考えがでた。

とてもわかりやすくてとても使いやすかった今後も使いたい

みんなの意見がパッとみれたのでべんりだった。

みんなの気持ちをロイロノートで見たらすごくいいことを言ってるんがいっぱいでたのですごくおもしろかった。

はっぴょうとしないでいっきにみんなの意見を見れるのはべんりだなと思った

図４．ロイロノート・スクールを使った授業後の感想（抜粋）

児童がお互いの意見や考えを、瞬時に共有することが可能となり、短縮できた時間を思考や対話に充てることができた。

また、タブレット端末を介することで、日頃の話合い活動に比べて対話が活性化し、学びが促進されることが確認できた（図５）。

本研究では、学習者に「ネットいじめ防止」に対する当事者意識を涵養するためには、映像資料を題材にすること、無記名で意見を共有することによって児童が感情移入しやすくなり、本音で対話することが有効であることがわかった。

いじめがあったとき、単なる「傍観者」ではなく「スイッチャー」や「報告者」など自分にもできることが必ずあることや、その役割を明確に意識することを本時では特に留意した。その結果、立場を明確にして考えさせることが当事者意識を涵養するための指導上の留意点であることが明らかになった。

LINEの使用率が本格的に上昇するのは、中学生になってからであるが、小学校高学年では予防的な意義が大きく、中学校入学前に実践しておきたい。

図５．タブレット端末を介して対話する児童たち

以上のように情報モラル教育の題材としてLINEを取り上げることは、有用であることが明らかになった。ただ、これらは機器の機能および使い方が日々進化するため、常に最新の状況を教員が把握していることが不可欠となる。デジタルネイティブ世代である大学生に協力してもらうなど、授業づくりでの新しい連携の発想が必要である。

今後、教育の情報化が進み、ますますICT環境が整備されていくことが予想される。ICTを活用した主体的・対話的で深い学びについて更に研究を進めていきたい。

その際、「社会に開かれた教育課程」[15]に象徴されるように、教員養成系の大学等との新しい連携の模索が不可欠であり[16]、今後の課題としたい。

【文献及び注】

1）三枝好恵・本間友巳「ネットいじめの実態とその分析―従来型のいじめとの比較を通して－」京都教育大学教育学部附属教育実践総合センター『教育実践研究紀要』，11,pp.179-186，(2011)

2）三島浩路・本庄勝「技術的観点からのネットいじめ対策」電子情報通学会『ソサエティマガジン』，34，pp.102-109，(2015)

3）文部科学省「小学校学習指導要領」, p.171,

(2017)
4）教育再生実行会議「いじめの問題等への対応について（第一次提言）」，(2013) http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/teigen.html（参照2018.9.10）
5）文部科学省「いじめ防止対策推進法の公布について」，(2013) http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1337219.htm（参照2018.9.10）
6）文部科学省「生徒指導提要」，pp.185-186，(2010)
7）清水祥平・今田晃一「ICTを活用した「特別の教科　道徳」の実践～「考え、議論する道徳」への転換に向けて～」文教大学教育研究所『教育研究所紀要』,26, pp.127-136，(2017)
8）清水祥平・今田晃一「ICTを活用したアクティブ・ラーニングの研究～情報モラル教育を中心として～」文教大学教育研究所『教育研究所紀要』,25, pp.113-124, (2016)
9）国立教育政策研究所「いじめ追跡調査2013-2015」 https://nier.repo.nii.ac.jp/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&page_id=13&block_id=21&item_id=1684&item_no=1（参照2018.9.10）
10）東京都教育委員会「いじめ総合対策【第二次】」 http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2017/02/09/08.html（参照2018.9.10.）
11）清水祥平・今田晃一，前掲書，(2016)
12）市河大・清水祥平・今田晃一「Webサイト版「情報モラル教材」の検討～デジタル版補助教材作成上の留意点～」文教大学大学院教育学研究所『教育研究ジャーナル』，Vol.9，No.1，pp.13-16（2016）
13）NHK for School「ココロ部」 http://www.nhk.or.jp/doutoku/kokorobu/（参照2018.9.10）
14）清水祥平・今田晃一，前掲書，(2017)
15）「社会に開かれた教育課程」
新学習指導要領の前文には、「教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる」と定義されている。
16）今田晃一「ICT活用は、アクティブ・ラーニングを促進する」『月間プリンシパル』11月号，pp.12-15,(2017)

添付資料(1)　授業の流れと指導のポイント(抜粋)

○学習活動	・指導のポイント　◇評価	時間
○ NHK for School「ココロ部」第4回『みんなに合わせる"友情"』を5:07まで視聴する。	・ 主人公「コジマくん」の立場に立って、自分がコジマくんだったどうするか？を意識して視聴させる。	5
【主な登場人物】 コジマくん・・・高校1年生、主人公。 ナナミ・・・コジマくんのクラスメイト。クラスのグループトークで不用意な発言をしてしまう。 タイキ・・・ナナミを仲間はずれにしたクラスメイトたちに「悪口はやめよう」と伝える。		
○ コジマくんはどうしたら良いか、なぜ悩んでいるのかを考え、タブレット端末に意見を書き込む。	・ 書いた意見は無記名で共有することを予め伝える。それにより児童の本音を引き出す。	3
○ ロイロノート・スクールを使って意見を共有する。	・ 児童から出にくい意見を教師が書き込み、児童の考えを揺さぶる。	3
○ 意見を交流し、様々な考え方があることを知る。	・「みんなに合わせる」ことは望ましい行動ではないが、そうしてしまうかもしれない気持ちを認め、否定しない。	5
○「いじめ防止対策推進法」や事前アンケートの結果をもとに、いじめの定義やいじめを見たときにとるべき行動について教師から話を聞く。	・ 報告者、スイッチャーの役割の大切さについて特に意識させる。	15
○ NHK for School「ココロ部」第4回『みんなに合わせる"友情"』を5:07から最後まで視聴する。	・ いじめを防ぐために、コジマくんがどんな行動をとるべきかを考えながら視聴させる。	5
○「コジマもそう思うだろ？」というクラスメイトからのメッセージに、どう返信した良いか、ワークシートに書き込む。	・ 実際にコジマくんの立場でメッセージとして書き込む言葉や立ち振る舞いを考えさせることで当事者意識を高める。	3
○ 振り返りをワークシートに書き込む。	・ より良いスイッチャーの在り方を意識させる。	4
○ 次時の予告を聞く。	・ 次時は他の児童がどのようなメッセージを書いたかを全員で共有することを伝える。	2

添付資料(2)　ワークシート

ワークシート

5年　組　名前(　　)

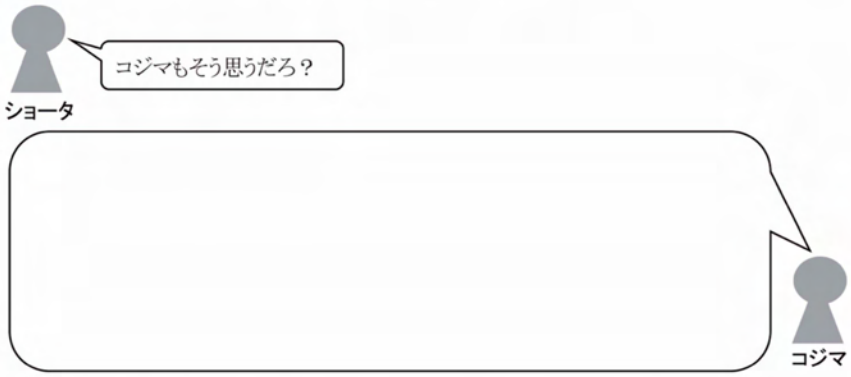
いじめの構造（こうぞう）

観衆　傍観者
スイッチャー
被害者 ← 加害者　報告者
スイッチャー
観衆　傍観者

スイッチャー　**SNSでいじめになりそう**

その場の空気を変える
○炎上しないように
○誰も傷つけず
○自分も傷つかず
○それとなく話題を変える書き込みを行う

○グループトークで、すぐに返信しなくてはなりません。
コジマくんはスイッチャーとして、どう書き込んだら良いでしょうか。



○今日の学習をふりかえって考えたことや、自分はこれからどうしていきたいか書きましょう。
(キーワード：スイッチャー)